

2
JAPAN
10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

西洋道中膝栗毛

四編上



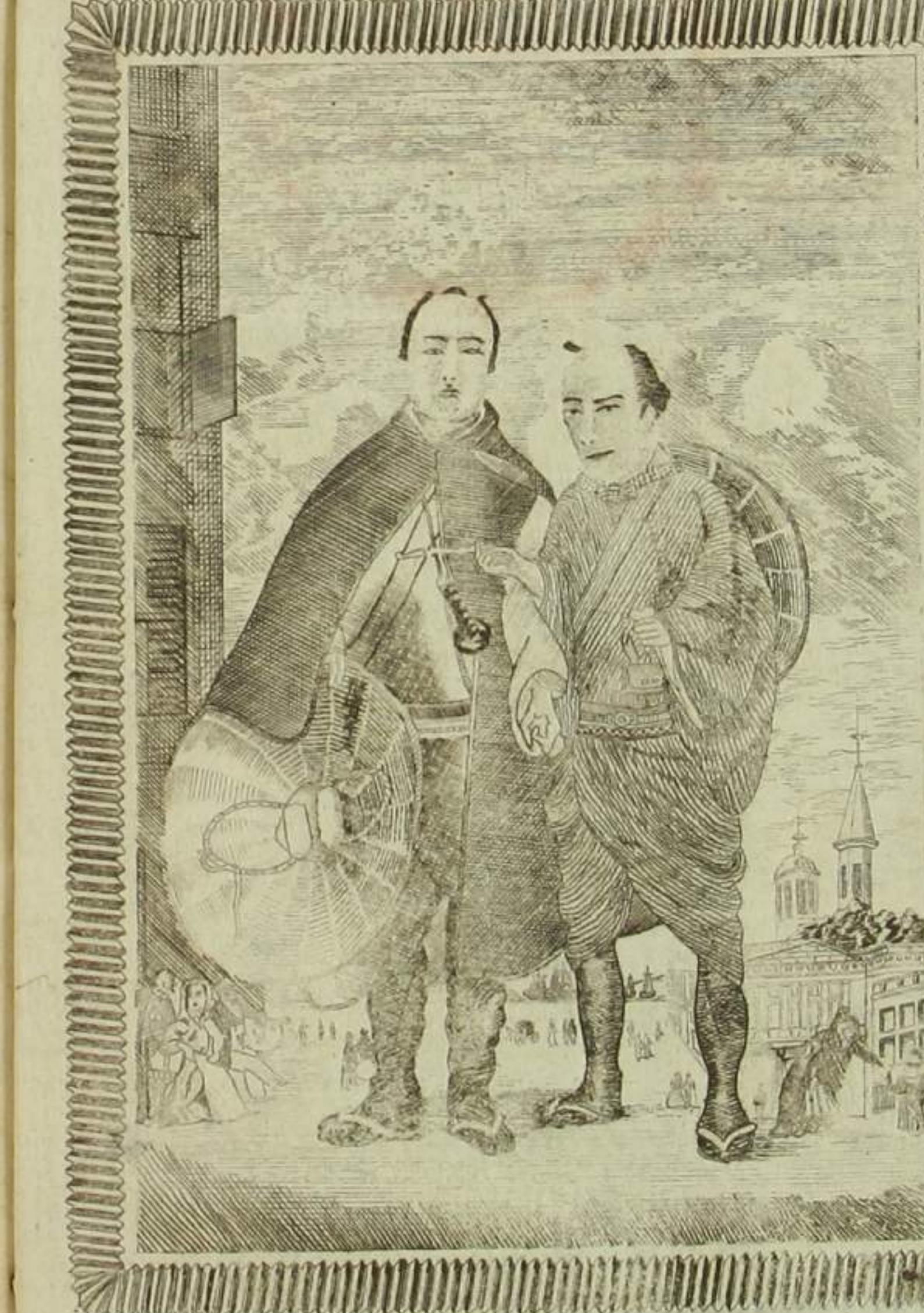
西洋道中勝栗毛曲

作者

假名垣魯文戲著

書肆

江島萬葉閣壽株



西洋道中勝栗毛第4輯序

西洋道中勝栗毛第4輯序
義兄弟假名垣魯文子。平常よ遊里を好んで。夕よ
吉原の月ふ嘯き。且よ嶋原の花よ戯れ。春の初
買の二日を待つ。去年と今歳の後朝を見帰り
出口の柳を慕ひ。秋の燈籠の初宵を待つ。茶屋
提灯の軒端よ釣る。晦日の月と愛らう。彼
常闇の中。娼妓でなければ夜が明ぬ。東海

姫氏國倭魂。魂膽の穴を穿ちく。娼妓評判記。八文字屋童忠の別號黒塗の駒下履と共ふ高く。花街新聞紙。文明舍化笑の變名。時刻の拍子木と等しく聞え。其北刃の道中と。文明開化の西洋風。觀察する當時の新聞。渠ハ苦界の八文舎。是ハ世界の五大洲飛脚船の新造出し。戀の港を突出の同じ

流れの廓詞。ザマスナンシの傾語箋。流連愉快の漢語通。ちよんきふホイの人力車を。蒸氣と馬車の膝栗毛ふ。乘替丁場の西洋道中華の輕尻一鞭馳く。評判千里萬國航海。萬笈閣の藏入も。仕合吉と蛇取ふ。染し文字も假名づれの便り。答ふ序へ

嗚呼我

辛未春睦月二日試筆

花街仲の町のティハウス中尾樓上
餘地遊屋も清攬の調子を奏る且

風柳子羨酒雄漫題



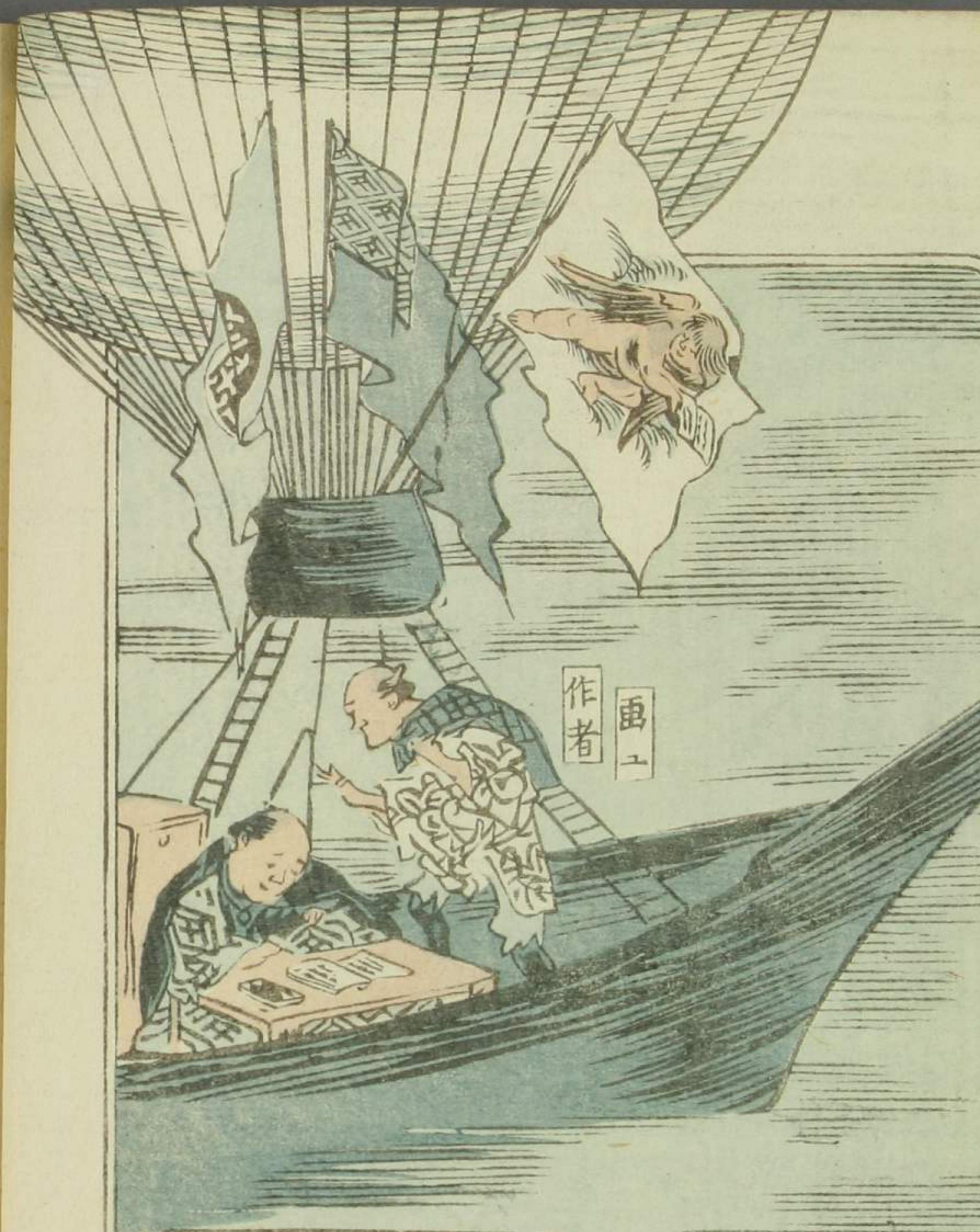
春農埜仁勇女留駒波曙
迺若紫遠手綱登茂見天

泉樓娼妓若綠詠





新嘉坡府



雲の峯
あれど
風を
波打つ
魯文

西洋道中膝栗毛

總編本文讀例

○當編初輯より以下梓客流行よ後もんこと
を怖れり作者画工傭書家割刷氏を促を
こと火急ち故ふ著述の拙き云も更々
傭書彫刻も是よ順せりかれば誤字闕字訂
改ともるよ餘間あらず製本幾兑の後作者
其杜撰ス驚けども六日の菖蒲十日の菊晦

ども前小立を不如元來幼童の觀物ふし
具眼ぐがんニ布ぬのづき書くわああねば其儘あまきにして唯い止やら
○初輯はつえきより以下不校合ふけうがあると遺憾のうがんとある條を
彫工ひがいの爲ためニ傍訓わざがくを謬まちされたるのみ乍まことにと
バ私わたくしとりくる傍訓わざがくニ曰いうち我等われらを因いのひに會あ
所ところをういあはういあは一杯いつぱいを曰いうへ此奴このやつをこううあど
りく類たぐいひの方言方言ニ支那支那の小説小説ニ所謂俗語俗語
ニ等ひととてしく東京とうきょうの下賤げせんが癖へんを穿うがつ戯わざ作者著者の

○閼なま目めああと刎きり去はなりたる行ゆき多おほく因いん之のく作つく
者ものの意いニ違たがふ縛しば少すくなくほど見功みこう者の推すいモ
べしと嚴程ごんていにしき再校さいけいの眼まなこを休やすフ

○英語佛語えいごぶつごハ片假名かたかなを以もつてあらし長言ながことハその
下條げじょうニ二行ふぎょうの假名かなを添そなえ云いと譯わけをわざに
短言たんごんハ其左そのひだりニ真字まじがなをもて解わかせ
及およぶ條じょうを終おひらんともふ小蠻語こまんごニ通つなせば縛しばハ

西洋旅案内と柱にし趣向へ友人砂燕子が航海の日記を礎とせり遮莫俗云々不ぬまくとひ話説又あくまで實地より渡らぬ聽取傍聞萬國の萬よ一箇も的當有づれば看官僥倖よ海容ゆくじし

○假名垣曾文戲著
「假名垣曾文戲著」は類余が号よ呼ぶ
よ似ざんど是の稗官者流の平常と爲所よやん

西洋道中膝栗毛四編上

東京

假名垣曾文戲著

海國之繪を披きく風船のせよ有るるを知り
海並新活を圖しき萬氣軒の絵ちをあらぐるも
近頃洋學一時ふ密け池豫の細圖よ各國有名の
地の締初臺蒙もよく略記横濱の岡港以東西
客對活の英佛両語よ後る船人楫絵ぞに時を
きらぬ印度海を平海の花御船出のけりしき

交際の商法仲間のみ行ほじて敵を取て行船万里
被縛は廊と北八丈大後庵庵義の一難ともに
セイゴンより又日毛羅の松酒を送るシンガポウル
の地へよ陸せずは北へ印度洋海の邊にシマ英者
利鷲あり赤道より北の宣ニ安の而もアリテ時僕
あざ署くに季の差別をしりも夏の通すふく
日本の中へも出で北へ胡凡ある西凡の新
活ふありまへ余の莫美物語よとらむを生じ懷も

シラク安しとぞ又ばあうれ虎声くわくとを
害もとらぐり朝とくかきを碎は郎かへととしく
異焼の繻年もひうりことどもひうり遡むるるを
泥づれば今い通は廊も里をまどひと煙草の生喫
氣よ發してかふ裏獨絶むとふを所と旅店を
立ちくはれ彼女と思あむにあふぞひく名意
暴虐ともあしきかりの家造りふ鶴鳴核その
余の目利ぬ目ゆひめづしきをも歎を嘆す

座よ高き門の椅ふれ櫻をうみたるわ若にこの
招きとこゝへ面色黒き異形の人わ穢みて身をと
ちびきあぐら日本族猫ヤツパンニンエーブケットハルロットビジオ
ントウセルスپندリツトルモニイ」といひやせド
○けば禽獸の種類多し國々荒御船の娘
まればちんちる鷄鶴うどを賣ぬよ物矣
るをあり又観ねふほしきのあくまく萬能也
もものとを

北
殊々さんえ縁へ渡の左田町う本家の身あと
くす橋アキラあまうとあやべつてあるがゆのこごづらねカ
からぬつらうからぬ人のラアキラヨあれども金鷲
がある銀ぞとづある金鷲カからのみとくり乳
釐アヤー一すゑねづらむにあつやの身アきるが
あるぜトントアホホ身ア牛房アをやくわかつ
ひやうアレミアムもづの身アをしてまづ



あれもちのへおとくへどきらわへうら大さらひ
タ「さんふヨソシヨヘエヘ云葉が英吉利のやうふ
かうはしから馬レ場をうづぞ「この印度の國
だらけあつてととま夏のやうぞそれざらけ
毛で生れの奴へあん場のうちから日本ゆきをも
黒シ場びとヨ「黒イハねんねく世界へどく
ナント多難はづとのうと酒病が黒ツカクは
跡「からアあつてあやれもあねへけあつてゆき

あちやアニイラセアグニイラふすやうかもシド
あくみやア黒ンだくふあくびらう「北」の國で
つまふ黒妻があくやをまぐ細長イ茶を五盤で
残つめく 扱把の葉を奏じうコツブへ
ヨ「ツトヨアガラス丸西澤湯」北アラムヒ
つあくられ「トねいのむくちたら」とも「ふくらぬや合たほ
きしんをもあせ」ところホアスモモナウのまくあく「北」
ヨ「ツトヨアガラス丸西澤湯」北アラムヒ

まくみやうといひをばつゆせナント 嘴くちが乾かわいく
あらゆべがあれを一ツせりあらしヒシコソトアラえ
ハツミヤラシハ巻まきをすくやううノ 体からモリハ娘むすめがふ
だれヲアモチヤアぬゆくあらん 北 まくひひあらふ
人ひともほしけるよもやく 体からざんあれく トあらをきよう
て煙草たばこもあけきびやへをえそくふつせそ詠詠は席せきへもけふふとこ
あくまびくくみすのとくを一ツちぎってあらしまふかしつつ すん
まとあめびよくうぞひそくつけるはあれん人ひとめふかくらば
一大トドケル体からそくぢやく 小谷こだにもげトあらをきふたせりせがれものあらら

のそだあふをあうけて二三丁めをまだされば北ハ ラットヒラの
モウぐひぢゅうぶとあへたもどより ラットヒラの
樹きのひづか小体こだいをふり揚あげてあんづう細ほそづ
ひじくくかとゞ地ぢふつゆく 体からあらびとまのよ
男おとこざれ十九十九でり口くちをぬきもとかにあじこつ
あんあふたんと生うくとあく西にし凡ふんざりのラーツや
ニツ壁かべシジムをえらむむてせざうる奴やつがあるりん
うよしんを駕かめやアズクアズクをとくが日ひを人の方ほうの眼まなこ
モートあらみみみみやア行きをでんぢらけし

ほどの馬車をうちアセアセとあがつて、車のうちア
セアセヤカゲ無事ふを平素をあらぐるぜえ張を
つけふアシレシソさんぢく生の風情をミトヨ
ちやアねへう「ラットその一ト」トモウちうよりがざる
やうやくたまきりむあやくくらかでちこ北「どくどくのうまなみ
うちあらしんろくとかくをたれ」
須田町さら西神田をうけてもあんあ西丸がまく
あうひふダ「つりぎよ。もひとう寝てゆう」
さら大さうび「背負てくれまうとまくはうのあるとまくの

百せうとも船を暴人せかれてこれをアテナ
セアセアセをうせとあらきがんあらしへ「スイーフ。トナテイス
コーウルぬそ人やうひ。あんべうけふとあくとうじてあくるとんく
まをかのねどんたりきかくふく「有罪」
がえくがまひたつてうづきを「コルペフル」トモアタたるま
る黒人ゆふべれびあめうのう死んで船をひくとせまくアリムアヘ
をひくとせまくアヘアリムアヘアリムアヘアリムアヘアリム
またすまたつけとあらがく「どうかくきあめくせんのとくのあうふつもあれ
くらをうらそれつうがくああめうらかくわうおきのをうけがやくロアキ
てねちうらふれひ地ハアホアヒキテうれたうひふうやうえあへきだりあ
あくとちのねあへきをちのうらひの黒人らを船をひくもうら
まうらひくとあめうらひをうらがくがくくへうれとこうれとくとくを
あくとあめうらひをうらがくがくくへうれとこうれとくとくを
せらきしのじにしこうがくとくとくの日中うけたひのとくのあくとく

西洋史



うることあられがひまされとすがとく日もひそじあらいたえ
うれしきたうもよみのねのあらあせをあわててさめぐれどあられ
あそなめのめかみ、國やうよもへきあめとくびまじうひ
ませたりあらじそうあうをしてハースウーもあざりたむのゆきの
とかひまがおもとく日もよみのふくらむとせんあめあひよたち
さうをあらうもとくめのまじめのまじめのまじめのまじめのまじめの
せんせんあらきとくらむちうき 俗 北やさんざやふあふの
ういだうひふそくとかをあげ

セコリヤの年を朝くとあくあれやせざし
らよみうあ もうヨざうまれとくカウス
あららきくあもしやアゼウモアラキヘせんとあせ
ぐひづかう種うらうるるうありやくのじくち

セガリひのと父 林 「もみけあじり日をども二日
うらしう定法だいろくだら三日のる物ものくのうも
志毛ね人北「あらしきんがぬらるる人ひと度どんだうて
西元まへひとう後ごのこてぐまく食くもどるやべが二日の
あるテヤよされちやア日を人の乾えんあがで見る也
殊あらア幸きをめぐせくうめくもくもく減まへ
あらうね人北「あらうも重おも後ごふあらうくまくマグウ
グウ後の寒さむが晴はるいてきくらくよせざよくある

「ラヤー」^ル日がくれかつてきたと
うのまことに物の中よ夜すが夜一夜あきらむと
あんの因果のよう食ふらる北「モモヨのうそれも
ゑみあらぬかわゆくがやくせ思へ来てまでなにし
もんふあるさんぞとひの親のうんぐるがるふを
つたのくらう是をありべ親たちもくらうもくらせ
絆「くらうけらうが縫ねくもきく縫うるじよ」と
くらうけらう北「往切紀の毛ひらおやアやくが縫

でもあくとを食ふりてのまへて死ハ
ても人画ぐがときしあむら足のくらべ巣をぬ
ちやアドガラム北「つまらぬくじとくらうんじせ
きあくろねへはくくにしあんふくろうよ夜中ゐる
アドンるあふでうくせむかもあまく多くうらうう
ユ風しきよはくを切つてみびるさんざんが一のよ
りを絆「まとヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨ
りんぐからで人のまへとあれのまへを樹舎やア

され給へし事あるべからずとん御て見えり
りへと立ちかづきをよせや 北「ヲワトマリシート
あんのござをどもあひゆるとおととせすつは
あらまむじの本をなすとおとひうるをて風の御城のやう
かとくをもせられがんぐとおとくまつする。やうと
月へあらだらのやうをみのびとくおとくとくのよ
はくある事ある事ある事ある事ある事ある事
ヤイレ やハヤー おへど

アレーモモギテサヘキナミタケリハシニトスル
トクニラニテカガマシタカシカタシタガ
マヒヤアタカベヘーだんくやハセシテたゞ

らわヘホノダンドラサウ ホモウモウ
アスカルシホアハイトスルモアゲてかづきをもざ
ツツムタマムカシヘカナシラヘの本をよせらん
ののとくももわざとおとくのわきをよせらん
とくはくやうきをあとくのけんやくをよせらん
をもをよせらんヒナゲシヒナゲシ筋ヒナゲシ筋ヒナゲシ筋
モモギテカタヒドヒドヒドヒドヒドヒド
あるあるらもセヒドヒドヒドヒドヒドヒド
がタ一からざく、さく、さく、さく、さく
りせかく本の板よつまうをあれもせふひくもせふひく
因木まくせがんじあとこびひけられ生まきへゆをあつてよせばよ
うせへせんじうのモルありつまうのうとてつをあつてよせま
る。あらんけつをちやくせとせじ「ラヤあらバモウセテルさんく

西洋樂毛四上

七



五年庚三月上

八

そんあーとせんとおはのひのふらんけんを
あはくおはからあはきくわくえちびくのびるア
モルカハゲアハクアムヘ「ああ、今日もう
ハタハタねがんパ雅トリップヂ。ゴン。エームトドカラ
モルカムカムマラムコム。エグーン。グワイツキ
モルニ

リーキミスヌヌレトモ
アキラムヌアリグム

ぢぐでやとけふあひふどくはらをさげれをのびモテルよあを
やどりくわううちれだちてかくとあう絲ぬ廊い通ぬ廊をすま
をのあんあくあくの器人を三人やとひそやどより北へ生花の
やまとさねとそよふふねあひゆがたづかがーをようじづくを
りあるニヤホモテルとジムーせととよととモテルを絲
そぞくつむちあうをかばくらきをまとうもちつ
めあみはくのとてくわくま羽屋のとてく
氣ぬあらでコリヤ異人エビシとひそくあ場ジムーを
やざくわかにをひふくんあうアチャク・ムジムジ
キモジロでうよくんあをられくわうンジムラア

おもひのこしとくにどせんぐとおもひのこしとくに
たまら國をましのヨ通「北さんあくへよく國を
まもぐるのうと海へりまかわせんぐと二友國と
りの國アハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハモテルさんぐおよく來あわせと強食つべ
あくすきのうつらこれと國をましのうめく
さふざきをあらアノウ通さん通「そうとも」エモシ
ねぐ大津繪のみ版國をだぐりやゑ「あわせ」

ろくこととあやアあるやア通「イヤササマアあるき
あぐらゆめくまくホンアヌダカタカウダ
「アイイー 緣め席えんげふのわくさうきつて
れ縁め席えんね縫しイエーたゞいに切ません
ぬもめんむ縫ちするむくじのじうたちがふく
ふげませうヤレー ふ実ふ縁め席めとうけ
ひじねの木の根ふひととくび異人とせら
とのまちがひあくいあくアゲモドデイイ

殊アシカヒトウタの多きの夢図歌かみくわ已あも一首にしつけ
身の料とありきりぬまごひ
縄ゆきふつあづる周スル足シテまきりん
虎タヌとよそく石イシよなまちこうびへ
殊ヤハ游トロりちやくむくいきモハ
移シテゆきそくあ人ヒトへ通スル廊ル異フジ人ヒトもとうち連スル
たもとぞありける

西洋道中藤栗毛四編上

